

## 『人間の絆』における「母親探し」のテーマ

肖 軼 群

### はじめに

サマセット・モームの半自伝的小説『人間の絆』は、主人公 Philip の母が亡くなる直前のシーンから始まる。眠たげな Philip 少年は母親の衰弱に気づくことができず、別れを告げることができないまま母を亡くす。‘It was not true that he would never see her again.’ (OHB 9) との語り手の説明にあるとおり、Philip は母の死を受け入れていないことがわかる。しかし彼はその後叔父夫婦に引き取られ、新生活を始める。幼い時からのメイド Emma との別れで涙する Philip が早くもその日のうちに彼女のことを忘れるシーンから、Philip は子供時代の思い出を乗り越えているように思われるかもしれない。しかし大人になった彼の恋愛を全体的に見ると、母への追憶、そして永遠に失われた母性愛を恋人に見出そうとする衝動がほぼ Philip のすべての恋愛関係を貫いている。作品の冒頭に母との別れの場面を据えるモームの目的は、Philip の「母親探し」という大テーマの暗示にあるのではないか。

第2章で亡くなり、第5章の回想以降に作品から早々に姿を消した Philip の母に言及する先行研究は数多く存在しているが、Philip に対する母の長期的な影響について論じるものは少ない。また、Philip の母性愛を求める側面についてはしばしば指摘されるが、その対象となる女性は、多くの場合 Norah と Sally の二人に限られている (Calder 13)。韓と展は、Norah と Sally の造形を作者モームの母の理想像に帰結し、Miss Wilkinson と Mildred をそれぞれ Philip の「精神欲求と身体欲求を満たすための道具」(49) として位置づける。門田は、子供を産んだ Mildred と共同生活を提案

する Philip が「疑似的な家庭をもつこと」に「喜びを見出している」(203)と指摘しているが、母親になる Mildred に対する Philip の感情の変化についての考察は深めていない。本論文ではまず、Philip が己の人生を見極めようとするプロセスで遭遇する様々な制限と混迷のなかで、特に呪縛としての「母の愛」に着目する。さらに、Philip の Mildred および Sally との恋愛関係が、実質的に失われた母の愛への希求と変奏であることを提示することによって、Philip の人生の底流としての「母親探し」の主題を明確にしたい。

## 1. 母の愛という呪縛

Philip は大人になるまでの過程で芸術を求める夢や恋愛関係を捨てていくが、彼がどうしても捨てられないものの一つとして母の記憶が挙げられる。作品内で描かれた母にまつわる唯一のエピソードは、自分の死期が近いと悟った彼女が最後の気力を振り絞って家の者の目を盗んで外に出て、自力で写真館にたどり着く一件である。息子がいずれ自分の姿を忘れてしまうことが耐えられないというのが、この衰弱しきった病人が独力で写真を撮りに行った理由だった。現実世界に起こったモームの母のエピソードを土台にしているだけに、この場面は作品全体を覆う暗い雰囲気醸し出し、読者に鬼気迫る迫力を感じさせる。まず『人間の絆』と、『サミング・アップ』(*The Summing Up*)における同じ事件に関する記述を比較する。

How could he be expected to remember her? She could not bear to think that he would grow up and forget, forget her utterly; ... She wanted her son to know what she looked like at the end. He could not forget her then, not forget utterly... She put on a black skirt, but chose the bodice of the evening dress which she liked best: it was of a white damask which was fashionable in those days. (*OHB* 15、下線部は筆者)

Once when she was lying in bed, I suppose after a hemorrhage, and knew she could not live much longer, the thought came to her that her sons when they grew up would not know what she was like when she died, so she called her maid, had herself dressed in an evening gown of white satin and went to the photographer's. She had six sons and died in childbirth. (*The Summing Up* 15)

淡々とした文章で綴られ、Hastingに「欺瞞的な簡潔さ」(‘deceptive simplicity’ 401) を持つと評される『サミング・アップ』の記述と比べると、『人間の絆』では息子に忘却されない執念が Philip の母から感じ取られる。母が亡くなる直前に撮った写真について叔父から聞かれた時、Philip は「この子が大人になっても私を思い出す何かを持ってほしい」(‘I wanted the boy to have something to remember me by when he grows up.’ *OHB* 17) という母の言葉を即座に思い出すことから、彼女の最後の願いが叶えられたであろうことがわかる。‘He recalled the words, but they meant nothing to him.’ (15) と書かれているように、まるで呪文を唱えるごとく、理解していない母の言葉を復唱する Philip 少年の姿に違和感を覚えたのか、叔父は思わず彼を凝視してしまう。また、モームの母は白いガウンを身に纏っていたのに対して、Philip の母は上半身だけ白の服を着ており、下半身は黒のスカートを履いている。ここで読者が真っ先に連想するのは、モームが幼少期を過ごした ‘Whitstable’ を作品内で ‘Blackstable’ に変えている言葉遊びかもしれない。しかし、母の服装にある白と黒の二色は、後述するように、母の記憶が温かい思い出である一方、Philip を苦しませる呪いでもあるという二面性を象徴しているようにも解釈できる。

母の姿が再び Philip の脳裏をかすめたのは、彼がキリスト教信仰を諦める時である。Philip が信仰を諦めたきっかけは、彼のコンプレックスの原因である内反足を直してほしいと神に願ったにもかかわらず、それが叶えられなかったという子供時代の出来事まで遡る。ドイツに渡ったのち Philip が

信仰心を捨てた直接的な原因は、アメリカ人の友人 Weeks との会話で多様な信仰と知性の限界を知ったことだが、深層心理においては、牧師の叔父に代表される偽善とその束縛から逃れたいという理由が存在する。そのため、Philip は信仰を捨てた直後に 'Freedom!' を叫び、自由の空気を吸う爽快感に浸るようになる。しかしこの自由がもたらす高揚感には、Philip に後ろめたい気持ちを感じさせる翳りが潜んでいる。

[B]ut there was one thing which made him wretched; he told himself that he was unreasonable, he tried to laugh himself out of such pathos; but the tears really came to his eyes when he thought that he would never see again the beautiful mother whose love for him had grown more precious as the years since her death passed on. (125)

'no expectation of an afterlife he would never see his mother again' (27) という Hastings の記述に示されたように、Philip の悲しみはキリスト教信仰を諦めた瞬間に、母と天国で再会する道が絶たれるという事実由来のものである。キリスト教の教義を信じないと決めたのに、このようなことで悲しむのはばかばかしいと Philip は思うが、涙を抑えることができない。Philip の涙の背後には、母が残した唯一の手紙を発見した時の作者モームの心境が垣間見られる。

The only letter of hers I ever saw was one that I came across when I was going through my uncle's papers after his death. He was a clergyman and she asked him to be godfather to one of her sons. She expressed, very simply and piously, the hope that by reason of his holy calling the relationship into which she invited him to enter would have such an influence on the new-born child that he would grow up to be a good, God-fearing man. (*The Summing Up* 14-5)

『サミング・アップ』で、母の筆跡、引いては母の生の声が記された唯一の手紙についてモームはその内容を紹介しただけで、その後子供時代の他の

回想に移行している。『人間の絆』で Philip が叔父の死後に見つけた母の手紙は、モームが現実生活で見つけた手紙の内容とほぼ同じである。今まで母の美しい姿は脳裏に刻まれてきたが、自分の知らない敬虔な母の一面に向かって Philip は奇妙な違和感を覚える。そのため Philip は手紙に込められた母のやさしさと実直さに直面できなくなり、思い切って手紙を千切るののである。この行動は母の記憶との決別として捉えられるかもしれない。しかし、母の純粋な心を示す手紙を自分が読むのは“indecent”だと感じる Philip が手紙を破棄するのは、まさに彼がまだ母への罪悪感に囚われていることの証明であるとも言える。キリスト教信仰を捨てることは、「実直で敬虔な人間になる」という母の期待への裏切りに他ならない。モームがこの手紙を読んだのは 1897 年の叔父の葬式後であったため、1890 年にドイツに渡り、そこで信仰を捨てた時点では母の期待を知る由もなかった。無償の愛を与えてくれた母のたった一つの期待に背いたことを知った時、モームが感じた罪悪感の大きさは十分推測できる。彼が手紙を読んだその年に『人間の絆』の前身『スティーブン・ケアリーの芸術的気質』の執筆を始めたのも、このやましさを少しでも解消しようとするためかもしれない。そして第 3 章の最後に Philip 少年が考えた「もうママに会えないなんて、あれは嘘だ。だって、そんなことって、ありえないもの」(“It was not true that he would never see her again. It was not true simply because it was impossible.” 9) という言葉と呼応するように、『人間の絆』には Philip の母の幻影が次々と登場するのである。

## 2. 母の想像を誘う Miss Wilkinson

Philip の最初の恋愛対象は叔父の旧友 Miss Wilkinson だが、彼女は Louisa 叔母の証言から推測すると少なくとも 30 代後半になっているため、Philip とは 15 歳以上の年齢差がある。Miss Wilkinson は肉体・精神の両面で Philip のロマンチックな幻想に当てはまり、彼の若々しい情熱を一時的

に勝ち取る。二人の初対面の時、PhilipはMiss Wilkinsonの華麗な装束に目を奪われるが、その服装の粗悪な作り、並びにMiss Wilkinson本人の場違いの軽薄さに気づいていない。Philipと親密になった後、Miss Wilkinsonはフランスでの自身の生活のエピソードを得意げに披露するが、の中には信憑性が疑わしい内容も含まれる。全知の語り手が「彼にもう少し人生経験があれば」と度々嘆くように、Philipは彼女の話すことをすべて鵜呑みにし、後に彼女に恋するようになる。しかしPhilipは果たしてMiss Wilkinsonに隠されている虚偽性に全く気付いていないのだろうか。Miss Wilkinsonが、パリの洋服屋の店員から自分の体つきを激賞されたというエピソードを話している時、Philipは思わず彼女の「太くて、格好が悪い」足首を一瞥する。‘He withdrew his eyes quickly.’ (143)との記述が示すように、彼はすぐそこから視線を逸らす。Philipの潜在意識にあるMiss Wilkinsonの本当の姿に対する不安は、Miss Wilkinsonの姿の描かれ方にもにじみ出ている。

He liked her much better in the evening than in the morning...At night she often looked very attractive, she put on a gown which was almost a dinner dress, and she wore a chain of garnets round her neck; the lace about her bosom and at her elbows gave her a pleasant softness, and the scent she wore...was troubling and exotic. She really looked very young then. (*OHB* 146)

She had taken off her skirt and blouse, and was standing in her petticoat. It was short and only came down to the top of her boots; the upper part of it was black, of some shiny material, and there was a red flounce. She wore a camisole of white calico with short arms. She looked grotesque. (159)

引用部分はそれぞれ若々しく見える時と老いが露呈する時のMiss Wilkinsonについての箇所だが、二つの引用箇所はともにPhilipの視線の特徴、即ち

肉体を覆う衣服だけに着目し、肉体そのものの描写を避ける傾向を表している。前者では、夜の Miss Wilkinson の服装、アクセサリーと香りが描写されるが、彼女の顔に関する記述は 'young' や 'attractive' などという形容詞による表現に留められている。後者においても、Miss Wilkinson の服装の種類や長さ、生地、色まで詳細に述べられるが、これらに覆われた肉体は抽象的な 'grotesque' という形容詞だけでまとめられている。Miss Wilkinson の肉体を直視することは即ち彼女の「古い」を認めることであり、同時に Philip が彼女から見出す幻影の消滅を意味する。

Miss Wilkinson と性的な関係を持つようになり、彼女の体を見て幻滅する Philip だが、彼は Hayward 宛ての手紙の中で Miss Wilkinson の偽りの姿を伝える。Miss Wilkinson 本人に関して空白になっていた身体描写は、手紙の中の虚像においてふんだんに与えられている。

He thought of the object of his affections. She had the most adorable little nose and large brown eyes - he would describe her to Hayward - and masses of soft brown hair, the sort of hair it was delicious to bury your face in, and a skin which was like ivory and sunshine, and her cheek was like a red, red rose. How old was she? Eighteen perhaps, and he called her Musette. Her laughter was like a rippling brook, and her voice was so soft, so low, it was the sweetest music he had ever heard. (161)

Philip が描いた恋人像は、鷺鼻で肌が荒い現実世界の Miss Wilkinson とは正反対のように思われる。詩的な表現の多用や、Burns の有名な 'A Red, Red Rose' の引用などから、この架空の女性の外見描写は、読書を好む Philip が文学作品から寄せ集めたものと推測されがちだ。しかし Philip が手紙の中で作り上げた恋人像は、小説からの影響からは独立しているように感じられる。この空想上の女性は、18歳の Philip<sup>1)</sup> の創造であるというより、むしろ作者モームの記憶に残る母の姿を土台にしているのではないか。

My mother was very small, with large brown eyes and hair of a rich reddish gold, exquisite features and a lovely skin. She was very much admired. (*The Summing Up* 14)

Edith was doll-like and beautiful. Her hair was a rich auburn, her pale complexion flawless, her dark brown eyes large and set wide apart. (Hastings 4)

大きな茶色の目、透き通る肌、そして整っている顔立ちは、どれも Edith Maugham の外見と寸分違わない。髪の色細かい違いが認められるものの、Hayward からの返事から Philip が手紙の中で描いた恋人の髪は「みごとな栗色で、ほんの少し金髪が混じっている」(‘exquisite chestnut which seems just touched with gold’ *OHB* 167) だと押し量られる。しかし、仮に Philip の母が若かりし頃このような美しい姿をしていたとしても、母の写真を一枚しか所持しておらず、しかもそこに写った死の間際の憔悴した姿しか知らない Philip にとって、このような姿を知る手段はまず存在しないはずだ。したがって、リアリズムからは些か逸脱しているように見えるが、Philip の想像は、モームが生まれた後に結核病を患う母親の、写真でしか見ることができない若い姿を再現したいという気持ちの産物であると考えられるのである。

また、Philip が設定した想像上の恋人の「18歳」という年齢からも、母親の姿を垣間見ることができる。『サミング・アップ』では、母 Edith は父より20歳以上若く、そして亡くなった時の年齢は38歳だったと、モームは書いている(15)。しかし伝記作家たちが記したように、実際に Edith は41歳で亡くなったのである(Calder 8; Raphael 9)。生涯母を思い続け、死の床にも母の写真を飾るモームが、母の年齢を間違えるとは考えにくい。しかし、もしモーム本人が母の亡くなった時の年齢が38歳であると信じて疑わなかったとするなら、彼の間違いは18歳の恋人という Philip の想像に一つの説明の可能性を与えることになるだろう。つまり、Philip が思い描いたこ



の恋愛対象は、ちょうど自分と同年ぐらいの、父と結婚した時の作者モームの母だという読み方である。Calder はモームの同性愛の根源を、母の死によって捌け口を失い、やがて変質したオイディプス的な情念に帰結している（12）。これに対して Philip の Miss Wilkinson への熱狂的な執着は、オイディプス的な情念の原初的な表出、即ち自分と同年の母の幻影を作り上げ、これを手に入れようとするに当たると考えられる。22 歳のモームは、「真に愛情深い母を持つことほど男の子に悪い結果をもたらす不幸はない」（‘few misfortunes can befall a boy which bring worse consequences than to have a really affectionate mother’）という言葉を書いている。この言葉の真意は、慈愛に満ちた母を持っていなかったら、母性愛を求めずにいられる自由を味わえられることにあるのではないか。愛情深い母を持つことは、Philip、そして作者モームが母の死によって取り上げられた母性愛を求める情念の出発点とも言える。この一見常識外れの発言から、成す術もなく恋愛関係に母の虚像を求めてしまう自身の呪われた運命を嘆くモーム青年の声を聞き取ることができるのではないだろうか。母と外見的な類似点を持ちつつ、現実ではかけ離れている Miss Wilkinson を初恋の相手に選ぶ Philip の経験を鑑みると、Miss Wilkinson は、Philip のロマン主義的な恋愛観を正し、現実と理想の落差を教える人物であると同時に、自分の人生に最も長い影を落とす「母親探し」の願望を彼に気づかせる重要な存在であると言える。

### 3. Mildred に見出される「母」の虚像

前節では、Philip が生涯忘れられないものの一つとして母の記憶を提起したが、彼にとってもう一つ忘れがたい存在は、ロンドンで出会った女給仕の Mildred である。ただし、Mildred についての論述を展開する前に、Philip の叔母 Louisa に少し紙幅を割く必要がある。なぜなら、熱烈な愛を捧げ続ける Philip は、Mildred との関係において人生最大の苦しみと屈辱を味わう

が、報われない愛情の当事者になることは Philip にとって既に二回目であると考えられるためである。少年時代の彼と Louisa 叔母との関係性は、後年の彼と Mildred との関係の行く末を予示しているように思われる。

Mildred に会おう前に、Philip は Miss Wilkinson に対して熱狂的だが長続きしない官能的欲望を抱き、Fanny Price から一方的に愛される経験をした。しかし 'it was a painful yearning, it was a bitter anguish, he had never known before.' (306) と書かれたように、Mildred に長い間持ち続ける「苦痛に満ちた渴望」は Philip にとって未知の領域にある感情である。しかも彼女によって尊厳が大きく傷つけられ、二回も裏切られた後も、Philip は彼女に名状しがたい感情を抱き続ける。Philip のこのような心境は、それまでの人生で子供に恵まれたことがなく、初めて子供を育てる Louisa 叔母のそれと似通っている。影の薄い Louisa は、作品の中で最も抑圧を強いられた人物の一人である。そのため彼女は研究対象として注目されることが少なく、単にモームの作品世界の「抑圧された女性」の一例として扱われがちである。冬の季節、夫は暖炉の利いた部屋で過ごす、彼女は暖炉の使用も許されないという一件でも窺えるように、利己的な夫との結婚生活は彼女にとって幸せなものであるとは言えない。しかし Philip の教育に関しては、珍しく Louisa は自分の主張を前面に打ち出している。Philip に祈祷文を暗唱させるという夫の指示を無視して、Louisa が甥にイラスト付きの本を読ませることは、その一例である。Philip の芸術的な天分を発見し、彼に絵を描くことを勧めたのも、青年時代に絵画に夢中だった Louisa 叔母であった。

Aunt Louisa during her youth had painted in water colours, and she had several albums filled with sketches of churches, old bridges, and picturesque cottages. They were often shown at the vicarage tea-parties. She had once given Philip a paint-box as a Christmas present, and he had started by copying her pictures. He copied them better than anyone could have expected, and presently he did little pictures

of his own. Mrs. Carey encouraged him. (80)

日常生活では夫の指示に従うばかりで、自分の考えていることをほとんど口にしなない Louisa が、若い時に絵を大量に描いていたという事実は、読者を驚かせる。Philip が画家になるためにパリに渡る決断においては、Miss Wilkinson の影響も確かに大きいのが、抑圧的な環境の中で筆を Philip に持たせることにより、絵画という一筋の光を彼に示した Louisa 叔母の重要性も見逃せない。また、叔母の絵は「牧師館の茶会によく客人に見せられる」という一文も、単なる事実の提示ではなく、むしろ前述したモーム特有の「欺瞞的な簡潔さ」がそこには隠されていると見なせるだろう。Louisa が青春時代に描いた絵は、牧師館という閉鎖的な場所から出ることがなく、絵画を理解する素養が皆無の夫以外にそれを鑑賞する人がいないという嘆かわしい状態にある。そのため、Louisa 叔母はパリに行きたいという希望を Philip から聞いた後、未亡人となったときに備えて長年貯めてきた自分の金をすべて Philip に渡す。彼女はまた Philip に、「偉い画家になったとき、わたしのことを覚えといて、画家への第一歩を踏み出す時に私が力になったのを思い出してくれるでしょう」(‘And perhaps some day when you’re a great artist you won’t forget me, but you’ll remember that I gave you your start’ 188) と言うが、この言葉は Philip の実の母の「私を忘れるな」を想起させる。Louisa 叔母がこの反抗的な養子に託したのは、まず絵画に注いでいた情熱、そして自分の代わりに外の世界に旅立つ夢であったと言えるだろう。

Louisa は Philip にありったけの愛を注ぐが、思春期の Philip は叔父と口げんかになるたびに彼女に荒々しく言い返す。Philip は叔母個人に対して嫌悪感を持っているわけではなく、その怒りは主に叔父に向けられている。しかし、Philip と夫の間で仲介役を担う Louisa が、結果的に二人からの怒りを一身に背負うことになるのである。Philip に理解してもらえず、夫にも自身の悩みを打ち明けることができない Louisa は、次第に生きる意欲を失い、夫より先に死にたいという気持ちを、Philip に打ち明ける。これは、従順な

態度で人生を過ごしてきた Louisa の唯一の反抗心の表出として考えられる。しかし、この反抗の炎が燃えるのは束の間で、自分のことしか考えない夫であっても、彼に先立たれる衝撃には耐えられないだろうと、Louisa は涙ながらに Philip に伝える。一見矛盾しているような感情を前に、Philip は戸惑いを隠せない。

It was incomprehensible that she should care so much for a man who was so indifferent, so selfish, so grossly self-indulgent; and he divined dimly that in her heart she knew his indifference and his selfishness, knew them and loved him humbly all the same. (188)

引用部分は叔母の言葉を聞き、夫に対する彼女の盲目的な愛情を理解できない Philip の心情を示しているが、作品を通読した読者はこの文章に隠されているさらに二通りの読み方に気づくだろう。Louisa が Philip を無条件に愛した結果、Philip から同等の愛を返されないことを鑑みると、Philip はこの文章における 'a man' に十分当てはまる。そして下線部の 'she' を 'Philip' に、'a man' を 'Mildred' に変えれば、そのまま Philip の Mildred に対する矛盾した感情を表現できる。自分の愛をどれほど受けても感動しない、自己中心的な Philip の性格を知りながらも、不器用に自分なりのやり方で愛を注ぎ続ける Louisa 叔母の姿は、冷淡で浮気的な Mildred が決して自分の情熱に感動しないことを承知しながらも彼女を愛して止まない Philip と重なり合っているように思われるのである。'She loved him now with a new love because he had made her suffer.' (29) という内面描写が表しているように、自分を「苦しめたがゆえに、かえってこれまでにない愛情」というマゾヒスト的な愛は、Philip が忠実に受け継いだ叔母の遺産のように考えられる。幼い頃と似たように、Philip はパリに向かう馬車の中で既に叔母のことを忘れてしまう。ところが Emma と別れた後、かつて叔母が自分に与えたものと同じような愛情を、これから自分が Mildred という女性に与えることを Philip は夢にも見ないだろう。不器用で抑圧的な Louisa 叔母は作品内では

副次的な人物の一人に過ぎないかもしれないが、「叔母 = Philip」の関係は、「Philip = Mildred」の関係の原型になっていることは明白である。

ここで視線を再び Mildred に戻すと、彼女の無教養で軽薄な性格が度々 Philip の反感を買うばかりでなく、その外見も決して美しいとは言えない。にもかかわらず彼女は Philip を何度も魅了し、彼の理性がこの女性の前で全くの機能不全になる。Mildred 自身が恋に落ちた二人の男もやがて彼女から魅力を見出せず、彼女を捨てることになる。Philip だけにその効果を発揮する Mildred の魔力に近い魅力の根源は、既に先行研究でも指摘されているように（池田 113）、病身の Philip の母を思い出させる要素もあるようだ。

Her name was grotesque<sup>2)</sup>. He did not think her pretty; he hated the thinness of her, only that evening he had noticed how the bones of her chest stood out in evening-dress; he went over her features one by one; he did not like her mouth, and the unhealthiness of her colour vaguely repelled him. She was common. ... He yearned for her. He thought of taking her in his arms, the thin, fragile body, and kissing her pale mouth: he wanted to pass his fingers down the slightly greenish cheeks. He wanted her. (306)

同じ段落中であるにもかかわらず、Philip の気持ちは Mildred の「蒼白の頬を嫌がる」から「そのやや緑のかかった頬を撫でてみたい」と百八十度に変化している。ここで強調したいのは、一目で Philip を惹きつける Mildred の不健康な外見である。Mildred は血色のない肌と華奢な体の持ち主である。いずれの特徴も、Philip の母親の遺影と似ている。‘The greenish pallor of her skin intoxicated him, and her thin white lips had an extraordinary fascination.’ (321) に用いられる ‘intoxicated’ と ‘fascination’ の二つの単語によって強調されるのは、Philip が Mildred に何回も軽蔑され嫌な思いをしたにも拘らず、そのたびに彼女の病弱な姿と不健康な肌色を忘れられない自分に気づいてしまうことである。まるで Philip の欲望を刺激したのは

Mildred 本人ではなく、彼女がちょうど持ち合わせている不健康な見た目のようである。作品の後半に入り、Mildred の容貌は妊娠などの原因でさらに衰えていく。しかし奇妙なことに、Philip はそのような彼女から新たな魅力を見出すことになる。

She no longer troubled to do her hair with the old elaboration, but just tied it in a knot; and she left off the vast fringe which she generally wore: the more careless style suited her. Her face was so thin that it made her eyes seem very large; there were heavy lines under them, and the pallor of her cheeks made their colour more profound. She had a wistful look which was infinitely pathetic. There seemed to Philip to be in her something of the Madonna. (*OHB* 387)

身なりを気にしなくなり、痩せこけた顔がより目立つようになった Mildred から、Philip は聖母像を見出しているが、果たして読者は彼に共感できるだろうか。モームは世間一般と異なるマリア像を持っているわけではなく、彼は短編 ‘A Woman of Fifty’ の中で登場人物の一人を聖母マリアに例え (‘her appearance of the Madonna’)、その形体を「均整でややふくよかなスタイル」(‘Her figure was very good, somewhat fuller than was the fashion of the moment;’ *Short Stories* 1263) と形容したのがその証拠である。妊娠している姿という共通点だけでは、不健康な見た目が際立つ Mildred と生命力の象徴である聖母マリアとの繋がりを説明できないように思われる。ここで母になる Mildred の容姿と、人生最後の写真に写っている Philip の母の姿とを比べてみる。

They showed the head and shoulders only, and her hair was more plainly done than usual, low on the forehead, which gave her an unusual look; the face was thin and worn, but no illness could impair the beauty of her features. There was in the large dark eyes a sadness which Philip did not remember. (14)

下線部の比較でわかるように、「普段よりむしろ地味」な髪型、「肉が落ちている」顔、そして「悲しみが宿っている」大きな目のいずれも、Philip の記憶に留まる母の最期の姿を想起させる特徴である。この中でも特に大きな (“large”) 目は、モームの母・Mildred・Philip の母というフィクション世界と現実世界の両側に居る、三人の女性を繋げる共通のものとして考えられる。妊娠と貧困によって徐々に衰弱していく Mildred だが、同時に Philip の抱く母の遺影の姿に近づいていくところは、注目に値する。つまり Philip にとっての Madonna 像は、彼の記憶の中に刻まれた母の最期の姿に基づく、極めて私的な聖母像である。Philip は我が子に対する慈愛の欠片もない Mildred から本物の聖母を見出すわけではなく、既にこの世にいない母を Mildred を通して夢想しているように思われる。Mildred と Miss Wilkinson は、女性像としてはかなりかけ離れているが、それぞれ若い時の母と晩年の母を Philip に見せる役割という点においては、共通性があると言えるのではないだろうか。

外見の他にも、Mildred には Philip に母を思い出させる特質を数多く持っている。Philip の母の人間像に関する情報の多くは、Philip の叔父の回想の中で提示されている。表向きでは牧師としての儉約を好む価値基準を持って判断しているように見えるが、内心自分より贅沢な生活を送る弟夫婦に対する嫉妬に駆られた Philip の叔父による情報は殆どネガティブなものである。Philip の母はお金に無頓着な人で、冬でも新鮮な花に囲まれた中で生活を送っていたという (14)。彼女が高い値段を度外視して、旬ではない葡萄を購入することも、牧師のひんしゆくを買う。“I don't know where the money goes to,” she said herself, “it seems to slip through my fingers like water.” (385) という Mildred 本人の言葉通り、Philip と同棲する時の彼女は文字通り湯水の如くに金を使い、Philip はそれを黙認する。Philip はさらに 11 月<sup>3)</sup>に Mildred との共同生活を始めた時に彼女が持参した陶器に入れるための花を買い、Mildred が葡萄を好むことを思い出すと、冬にもかかわらず彼女



のために葡萄を買う。

She had several jars of green earthenware.

“I'll get you some flowers for them,” he said. (374)

Passing a fruiterer's, he remembered that Mildred was fond of grapes.

He was so grateful that he could show his love for her by recollecting every whim she had. (383)

Philip 本人は無自覚のうちに、少ない収入を超える出費を自分にさせる Mildred と過ごすことによって、あたかも外科医である夫の収入に相応しくない贅沢をする母と暮らしていた時の父の生活ぶりを再現するのである。

Philip が Mildred から母親的な側面を見出していることの強力な証左の一つとして、Philip と深く関わった五人の女性の中で、我が子を産み、母親になったのが Mildred だけであるという事実が挙げられる。Philip と一回目の別れをする前に身籠ったこの子供は、Mildred の裏切りに由来する辱めを常に Philip に想起させる存在のはずである。にもかかわらず Mildred と浮気相手との子に対して、Philip は並々ならぬ情熱を注ぎ、その程度は、当の母親の Mildred ですら訝しまざるを得ず、時に我が子に嫉妬を感じるほどのものである。

And the only time the old, tender smile came back into his eyes was when she stood with the baby in her arms. She noticed it when she was being photographed like that by a man on the beach, and afterwards she often stood in the same way for Philip to look at her. (530、下線部は筆者)

母親になった Mildred が赤ん坊を抱いて立っているところがカメラに収められることは、なぜ Philip をここまで感動させ、昔のような笑顔を取り戻させる唯一のきっかけになったのか。ここでは二つの要素が考えられる。写真には①立っている母親が収められ、そして②親子が同時に写っていること



である。Philip と生き別れるときの母はベッドに横たわった姿であり、そして弱まった体のせいで立つことすらままならない彼女が写真館で撮った写真にも、座った姿が収まっているだけである。彼女が残した写真にはもちろん、Philip を抱く姿が撮られたものは存在しない。幼い頃に母を亡くした Philip は、Mildred の子に幼き日の自分の姿を見出し、一生見ることができない自分を抱く母の写真を幻想しているのかもしれない。Philip は子を産んだ後の Mildred に対して官能的な欲望を抱かなくなるが、彼女が赤ん坊を抱いている姿をたびたび見たがる Philip の目には、Mildred を乗り越えて、存在しない写真に写る母の姿が見えているのではないだろうか。

Mildred は最終的に Philip と結ばれず、彼の失われた母性愛の源にもなれない。'her own "interest" to be self- rather than other-directed' (218) という Sanders の指摘のように、Mildred の欲望は終始自分自身にしか向かっておらず、このような彼女が妻にも母親にもなれないのは必然である。Philip が二人でのパリ旅行の計画を Mildred に教える時、彼女は一瞬結婚を暗示するような 'honeymoon' という言葉を使うが、すぐに Philip に金を要求する。この箇所は、Mildred が Philip に示す偽物の感情の裏にある本物の私欲の存在を強調する強烈なアイロニーである。子供が生まれた後、Mildred は一時的に心の落ち着きを見つけたようだが、献身的な母性愛を子供に与えることができない。既に自分に性的な欲望を抱かない Philip を誘惑し、彼に拒絶される Mildred は、Philip が仕事で外出した時に癲癇を起し、子供を連れて姿を消す。その時に彼女は Philip の持ち物を洗いざらい破壊するが、その際に Philip の母の写真も割られる ('On the dressing-table were photographs of Philip's mother, the frames had been smashed and the glass shivered.' 537)。彼女の内に母の幻影を見ようとする Philip の夢もこれで完全に壊される。その後 Philip が最後に Mildred に会った時、彼女は赤ん坊がすでにこの世にいないことを Philip に告げるが、Philip は「とても嬉しい」という予想外の返答をする。Philip にとって赤ん坊の死は、

Mildred が終始「性への執着」(‘her own obsession with sex’ 528) を最重要視する女性であり、「我を忘れるほどの母性愛」(‘the maternal passion which might have induced her to forget herself 508) の持ち主になれないことの非情な宣告であり、長年母を求め続ける Philip の解脱の第一歩を象徴しているのではないか。

#### 4. 「母親探し」の超越

作品の後半で Philip が初めて家族の温もりを感じる Athelney 家の雰囲気は、『人間の絆』の抑圧的な基調と対照的な印象を読者に与える。父親の Athelney 氏は妻や子供と気軽に冗談交じりの会話ができるユーモラスな人物で、高圧的かつ偽善的な叔父と対照的である。裕福とは言えない生活を送っているが、この家の子供たちは「丈夫で健康的で活力に溢れている」(‘strong, healthy, and vivacious;’ 659)。投資の失敗と Mildred との決別で、経済的な貧困と精神的な疲労に苛まれる Philip は、この家族に癒され、新生活に必要な心の強靭さと伴侶を見つける。それまでの Philip の暗い人生との違いを最も明確にするのは、彼と最終的に結ばれる Athelney 家の長女 Sally の、殆ど Philip の母や Mildred とは正反対と言えるほどの健康的な外見である。

Sally had frank blue eyes, a broad brow, and plentiful shining hair; she was buxom, with broad hips and full breasts; and her father, who was fond of discussing her appearance, warned her constantly that she must not grow fat. She attracted because she was healthy, animal, and feminine. (636)

Sally に用いられた下線部の三つの形容詞は、それぞれ Philip のそれまでの人生の三つの側面、即ち母・宗教・官能における超越に照応している。病弱な母の姿と不健康な Mildred の束縛から解放された Philip は、心身ともに ‘healthy’ な状態にある Sally を伴侶として選ぶようになる。‘animal’ は

Mildred の「不愉快な上品ぶる態度」(‘odiously genteel’)とは正反対の意味合いの形容詞であるだけでなく、後に Philip が下す「サクソン人の女神」(‘Saxon goddess, but no immortal had that exquisite, homely naturalness;’ 669) の評価と共に異教的な響きを帯びる表現でもある。Mildred に対しては一回も使われなかった ‘feminine’ という表現は、官能的な魅力ではなく、心身の健康さと慈愛を核心とする Philip の新たな女性観を物語っている。

しかしいくら Sally が母性的な愛を身に付けた早熟な娘であるとはいえ、三十歳近くになる Philip が自分よりずっと年下である Sally から母の愛を感じるといのは、いかにも倒錯的に見える。にもかかわらず、彼女の存在は自分を落ち着かせる (‘soothing’) ものであることを Philip が認めざるを得ない。Sally と Philip の母親との間では、年齢や外見などの大きな違いがあるものの、二人の女性の接点は作品の最後の数章で畳みかけるように現れてくる。第3章には Philip が最後に母親の部屋に入った場面が描かれ、その際にラベンダーの香囊の匂いは彼にとって母親の匂いのように感じられる。ラベンダーが作品の中で再び登場したのは、Sally がラベンダー色のボネットをかぶって Philip の前に現れた場面であり、これを見た Philip はようやく彼女の魅力に気づくことができる。

The day had only just broken, and there was a nip in the air; but the sky was cloudless, and the sun was shining yellow. Sally, holding Connie’s hand, was standing in the middle of the road, with a towel and a bathing-dress over her arm. He saw now that her sun-bonnet was of the colour of lavender, and against it her face, red and brown, was like an apple. She greeted him with her slow, sweet smile, and he noticed suddenly that her teeth were small and regular and very white. He wondered why they had never caught his attention before.  
(656-57、下線部は筆者)

Philip が「初めて」Sally の齒の美しさに気づくところから、読者は再び女

性の顔と肉体を避けがちな Philip の視線に気づくことができる。しかしここで重要なのは、この場面での Sally が赤ん坊を抱く Mildred と対照的になっていることである。Connie は Sally の娘ではないが、長姉の Sally は自分の兄妹たちを ‘children’ と日常的に呼んでおり (487)、兄妹に対する彼女の感情は Philip の観察通り、「母のようで姉のような愛情」(‘something maternal and something sisterly’) である。そのような彼女が薄明りの中で子供の手を引きながら立つ姿は、真の母性愛が伴っていない、形だけの Mildred の「親子写真」よりも遥かに崇高なものに見える。

Sally の体に Philip が再度惹き付かれたのは、彼が Athelney 家と共に農作業をするときのことである。

Her walk attracted his notice; it was not particularly graceful, but it was easy and assured; she swung her legs from the hips, and her feet seemed to tread the earth with decision. (663)

優雅とまでは言えないが、一点の揺るぎもない歩き方が Philip の注意を惹くのは、あながち意外なことではない。内反足を長年患っている彼にとって、Sally の健康的かつ揺るぎのない歩き方は羨望の対象になるのが必然である。また、生命力を感じさせる Sally の歩き方は、Mildred の「いつものように」少し背を屈めて歩く」(“stooped a little when she walked (she had always done that.)” 393) 姿と正反対な雰囲気 را帯びている。ここで、『人間の絆』の中で最初にその歩き方が描写されている女性を見てみよう。

She got out of bed and began to dress herself. She had been on her back so long that her legs gave way beneath her, and then the soles of her feet tingled so that she could hardly bear to put them to the ground. But she went on. (15)

長い闘病生活の末、足に力が入らないどころか、歩くたびに針で突かれたような痛みを感じても、Philip の母は息子に写真を残したい一心で歩き続けた。ここでの描写は恐らく Philip の想像によって加筆されたものであり、実際

に病弱な Philip の母は Sally のような健康的な歩き方はできないはずである。しかし肉体的な制限を克服しようとする強い意志力を持つ母の姿の想像は、Philip、ひいてはモームの理想の女性像の一部を示していることがわかる。Philip が Sally の歩き方に注意を惹かれるのは、その歩き方をする女性が Philip の抱いている想像した母の姿と重ねたためであろう。

Philip と Sally の結婚は、長年の「母親探し」の終結、換言すれば母との別れとして描かれている。Philip はやがて Sally と性的に結ばれるわけだが、重点的に描かれているのは、Philip が Sally の脛にキスする場面である。これは第 1 章で眠りに落ちた 9 歳の Philip の目に母親がキスすることに対する、20 年後の返答のように読むことができる。

The woman kissed his eyes, and with thin, small hands felt the warm body through his white flannel nightgown.... He tried to make himself smaller still as he cuddled up against his mother, and he kissed her sleepily. In a moment he closed his eyes and was fast asleep. (1)

“Milk and honey,” he said. “You’re like milk and honey.”

He made her close her eyes and kissed her eyelids, first one and then the other. (669、下線部は筆者)

父に付けられた Sally の本名 Maria de Sol に呼応するように、Philip が Sally に求婚した日の天気は晴れで、日の光が差し掛かっているという情景描写が作品の最後の一行である。若い母の幻影を見たいがために Miss Wilkinson に惹きつけられ、死に際の母の姿、ないし赤ん坊を抱く母を想起させる Mildred に心酔した Philip だが、彼の「母親探し」の終着点は「18 歳」<sup>4)</sup> の少女 Sally である。作品の最初の一文で表された重苦しい雲が押し掛かる場面と対照的なこの光は、Philip の「母親探し」の成就を暗示しているように思われる。

## 結び

『人間の絆』は、登場人物の中で「自由の欠落が最も目立つ」(‘the character whose lack of freedom is most impressive’ Woodburn 223) Philipが様々な束縛から自分自身を解放する物語であり、その種類は大まかに「信仰からの解放」「藝術からの解放」「恋愛からの解放」の三つに分けられる(池田 108)が、以上のとおり、本論はこの三つの束縛と並列する「母からの解放」について指摘した。Mildred と Sally という極めて対照的な二人の女性に象徴されるように、Philipの恋愛関係はそれぞれの特異性を持ち、そこから一つの共通点を見出すことは難しい。しかし、Philipが恋愛対象から見出す母の虚像を紐解くことによって、複雑な恋愛関係が共に指向する「母親探し」のテーマを抽出することができた。「母の愛を喪うところではじまり、母性的な愛へ帰っていくところで終わる」(越川 53) この作品における「母」の存在は、Sallyに表出されるようにPhilipに生の活力を与えるポジティブな愛情と、Mildredに表出されるようにPhilipに理性を失わせるネガティブな執着とが表裏一体をなす、二面的なものである。

最後に、『人間の絆』の結末の場面についての議論で本論をまとめることとする。

I sought freedom and thought I could find it in marriage. I conceived these notions when I was still at work on *Of Human Bondage* and turning my wishes into fiction, as writers will, towards the end of it I drew a picture of the marriage I should have liked to make. Readers on the whole have found it the least satisfactory part of my book. (*The Summing Up* 121)

読者が結末に不満を抱くのは、Mildred と Philip の間で展開される感情の激しい起伏と人間性に関する思考と比べると、PhilipがSallyへの恋心に気づいてから求婚に至るまでのわずか5章で収まったこの二人の感情が、いかにも竜頭蛇尾な印象を与えるからであろう。Sallyの母性的な感情が突出して

いる一方、配偶者としての Philip への愛情の表出が少ない印象があるからだ。Philip 自身も Sally のことを「愛していない」と明言し、さらに Sally からの感情が果たして愛なのかどうかについても確信を持つことができない。柏原は 19 世紀末からの教養小説の約束事が本作品の結末に与えている影響を強調し、「『人間の絆』も、その伝統から抜け出たものではなかった」（198）と述べている。つまり Mildred との苦しみに満ちた恋愛関係は Philip の成長に不可欠な段階であり、Sally との結婚は Philip が多大な代償を払い、この段階を乗り越えた後の必然的な報償として考えられている。しかし、読者が納得しないであろうことを先読みし、自己弁護しているモームは、この結婚を「私自身がしたい結婚」と考えている。上述した Sally の造形にある数々のヒントから考えると、モームはこのいささか陳腐な結末に、今までの人生で追いかけていた病弱で慈愛的な母ときちんと別れを告げ、健康で母性的な女性と新生活を始めたいという私的な希望を潜ませていると言えるのではないだろうか。恋愛関係に母性愛を求めるという Philip の願望が叶えられ、「母親探し」の呪縛から解放されることは対照的に、モーム自身は結婚生活に幸福を見出せず、晩年になっても「母の死は私を 80 年以上苦しめ続けた、人生で最も鮮明な記憶かもしれない」（‘Perhaps the most vivid memory left to me is the one which has tortured me for over than 80 years—the death of my mother.’ *A Traveller in Romance* 263）という嘆きの言葉を発している。Sally に求婚する直前に、Philip は一瞬 Mildred だと思ったが人間違えだった女性の姿を捉え、自分が生きているうちに Mildred を忘れることは叶わないだろうと思う。また、第 89 章で Philip が Athelney 家で初めて家庭の幸福を味わった後、次の章で全身を黒で纏った Mildred が彼の前に現れる。ここには、「私を忘れるな」という母の遺言が、幸福の絶頂に浸る Philip、そして現実世界におけるモームに仄かに付き纏っていることが、暗示されているのではないだろうか。

(※作品からの訳出にあたっては、行方訳を主に参照したが、適宜訳し変えた箇所もある。)

注

- 1) この時点の Philip の年齢について、下記の表を参照のこと。

章	年齢	テキスト
15	13	The King's School at Tercanbury, to which Philip went when he was thirteen... (54)
16	14	A year passed... (60)
17-20	16	Philip passed the next two years with comfortable monotony. (66)
21	16 (夏)	Sometimes friends came...and the visitors spending August by the sea... (86)
22	17	Philip arrived in Heidelberg one morning in May. (94)
29	17 (冬)	Winter set in. (125)
31	18 (夏)	If he left Heidelberg at the end of July they could talk things over during August, and it would be a good time to make arrangements. The date of his departure was settled, and Mrs. Carey wrote to him again. (137)

- 2) 前章の Miss Wilkinson の外見描写と比較すると、前者では、肉体への描写が避けられ、'grotesque' という単語だけで肉体の特徴がまとめられている。後者では、唇や肌の色、胸骨などといった肉体の部分だけが描写され、同じ 'grotesque' の単語は Mildred の名前だけに使われている。二人の女性の外見描写は、互いに裏表をなしているように見て取れる。
- 3) 第 69 章では、Mildred が出産予定日が 3 月初めだと言うのを聞いて、Philip が「あと三ヶ月だね」と答える会話が描かれている。従って、70 章で花を購入することと第 71 章で葡萄を購入することのどちらも、12 月から 2 月まで、つまり冬に起きた出来事である。
- 4) 初登場の時に 15 歳未満 ("Fifteen, father, come next June." Ch. 87) の Sally だが、第 95 章 (on Christmas Day he gave small presents to Mildred and the



baby.) と第110章の二回のクリスマス (Christmas that year falling on Thursday, ...) を経て、さらに Philip の冬学期を経て (Ch. 115)、Philip と結ばれるのは初登場から数えて三年目の9月 (the fitful September breeze was heavy with the goodly perfume of the hops. Ch.118) である。この時の彼女はちょうど18歳になる。

## 参考文献

- Calder, Robert. *Willie: The Life of W. Somerset Maugham*. St. Martin's Press, 1989.
- Gaździńska, Anna. "A Woman Imprisoned: Analysis of Formal Inferiority of Women in Selected Novels of W.S. Maugham." *Acta Universitatis Lodziensis. Folia Litteraria Anglica*, vol. 5, 2002, pp. 71-85.
- Hastings, Selina. *The Secret Lives of Somerset Maugham: A Biography*. Random House, 2009.
- Maugham, Somerset. *The Complete Short Stories of W. Somerset Maugham*. Heinemann, 1951.
- . *Of Human Bondage*. 1915. Signet Classics, 1991.
- . *The Summing Up*. 1938. New American Library, 1951.
- . *A Traveller in Romance: Uncollected Writings 1901-1964*. edited by John Whitehead, Anthony Blond, 1984.
- Raphael, Frederic. *Somerset Maugham and His World*. Thames and Hudson, 1975.
- Sanders, Lise Shapiro. "The Failures of the Romance: Boredom, Class, and Desire in George Gissing's *The Odd Women* and W. Somerset Maugham's *Of Human Bondage*." *MFS Modern Fiction Studies*, vol. 47, no.1, 2001, pp. 190-228.
- Woodburn, O. Ross. "W. Somerset Maugham: Theme and Variations." *The English Journal*, vol. 36, no. 5, 1947, pp. 219-28.
- 池田義一郎「人間の絆」『モーム研究』後藤武士、増野正衛編、新潮社、1959年、101-120頁。
- 門田守「教養小説としての『人間の絆』—真理の追究のための物語—」『奈良教育大学紀要』第55巻第1号、191-204頁、2006年。
- 柏原啓佐『モームの文学宇宙：仮面に隠れた人間観察』春風社、2003年。
- 韓玲、展紅梅「『人間の絆』における女性から見るモームの女性観」『安徽文学』第9号、49-50頁、2006年。
- 越川正三『サマセット・モームの全小説』南雲堂、1972年。
- 行方昭夫訳『人間の絆』岩波書店、2001年。